秋田県立博物館研究報告第31号　102～95ページ　2006年３月

翻刻『伊津女歌集』

中村　美也子*

はじめに

幕末から明治にかけての秋田において活躍した女流歌人・後藤逸（註１）について、近年和歌の翻刻がなされており、『後藤逸女　藻塩草　史料と背景』（高橋傳一郎著作・桂文庫）が研究書としても詳しい。しかし、後藤逸の研究はまだ始まったばかりであり、資料がどの程度現存するのか、自筆のものか、書写されたものかなどの整理と研究も今後の課題であり、より多くの資料にあたってみなければならない。『伊津女歌集』（註２）については自筆資料の可能性が低く、後世の書写本であると考えられる点が多い。しかし、歌集に含まれる和歌を短冊や色紙に自筆していることから、和歌自体は後藤逸の詠んだものであることは間違いなく、後藤逸の和歌に関する研究という点では、和歌の整理・研究上、意義のあるものと考え、翻刻をおこなった。なお、このレポートは高橋傳一郎氏の翻刻私家版『伊津女歌集』に学びながら、中村が再度翻刻して加筆したものである。

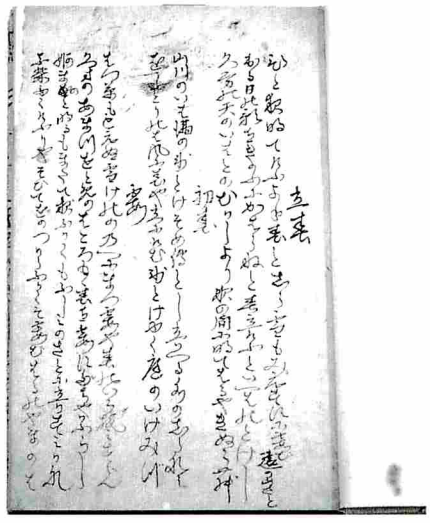
凡例（翻刻について）

一、字体及び仮名遣い等は適宜現行の表現に改め、濁点を補った。

二、明らかな誤字や脱字については文中の（　）内に補った。

三、繰り返し記号及び改行は原文通りとした。

四、原文内の訂正部分は、訂正にあわせて翻刻した。



立春

ひと夜明てけふより春としら雪もみえずに霞む遠の山ざと

出る日の影はきのふにかわらねど春立けふといへばのどけし

久方の天のいはどのむかしより夜の間に明てはるやきぬらむ

初春

山川のいはまの氷とけそめてとし立かへる水のしらなみ

をしどりのは風に春や立ちにけむ氷とけゆく庭のいけみづ

霞

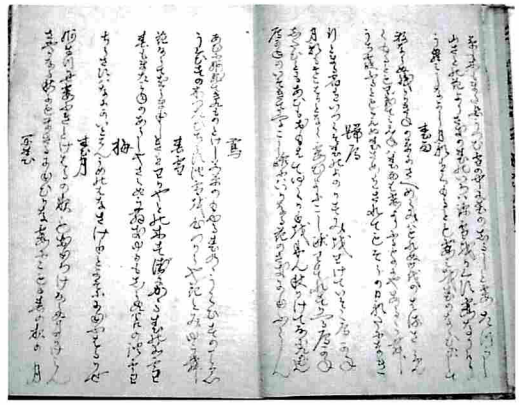
はつ草ももえぬ雪けののべにまつ霞や春のいろをみすらん

久方のあまつをとめのはごろも、春は霞にたちやかふらし

あまのと(の＝脱)明るもまたで夜ふかくもふしみのさとに立かすみかな

真柴たくけぶりやそひてをのづからふかくぞ霞むはるのやまのは

*秋田県立博物館



草も木もまた色うつむ雪の中に春のしるしと霞たつらし
山さとの花よりさきの春のいろは深雪をかくす霞なりけり
うらみしなよし月影をくもるとも霞を春のならひにはして

春雨

数ならぬ残るかきねの草にさへめぐみはもれぬ御代のはるさめ
くもるともわきてみえねば春雨は霞よりふるものにやあるらむ
うち霞ふるともみえぬ春さめはされともそらの日影だになき

帰雁

行とまる宿はいづくぞ春のよのかすみをわけていそぐ雁かね
月影もそこはかとなく霞むよにこし路わすれずかへる雁かね
したひともあひもおもはでゆくかりを来ん秋かけてなにたのむらん
雁かねのいそぎてかへるこし路にはいかなる花のさきにほふらん

鶯

あひにあひてきくものどけし若草のもゆる春の、うぐひすのこえ
うぐひすの木つたひちらす淡雪を心つからや花とみゆらむ

春雪

花ならでをらまほしきはわかやどの木ずえにか、る春の若雪
春もまたみねのあらしやさらぬらむきゆるもしらぬ谷の淡雪

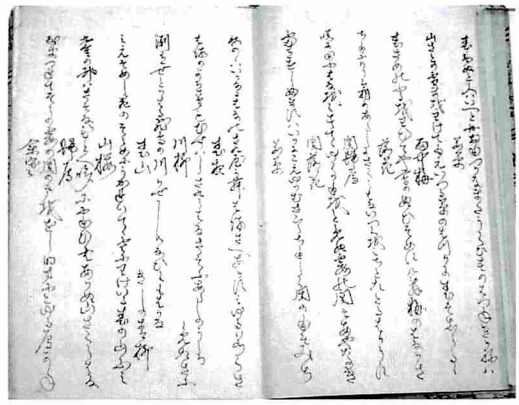
梅

ちらさずばなにかいとはんうめのはなさけりとよそにほふはるかぜ

春月

あまつかぜ霞ふきとけはるの夜もおぼろげならぬ月のかげみん
さやかなる秋にもまさるにほひかな霞にこもる春の夜の月

早春



春来ぬと人はいへどもおぼつかなまたうぐひすのはつねきかねば

若草

山さとの雪まをわけてもえいづる草のはつかに春ぞしらる、

雨中梅

春雨のふるをわびてや鶯のぬひそめにけむ梅のはなかさ

落花

ちりにけり今朝のあらしにさくらはないづくをみちとたどるばかりに

関帰雁

咲にほふはなをみすて、ゆくかりをとめぬ霞の関ぞあやなき

関落花

ふむはをしふまずばいかにこえゆかむさくらちりしく関のほそみち

若草

秋の、はいかなるはなのさくやらむはるさへあかずみゆる若くさ

春夜

はるのよは夢もむすばじさくらばなさそふあらしのうしろめたさに

川柳

渕はせとかはる飛鳥の川かぜになびくもはかなきしの青柳

春山

みえそめし花のそらめにうかれいでて雲にわけいる春の山ふみ

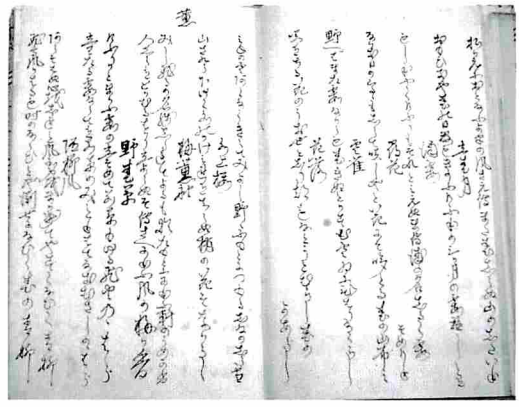
山桜

九重の都はさそゐひとへだににほひはあかぬ山ざくらばな

帰雁

なきつれてそらの霞の関の戸ををし明方にこゆる雁かね

余寒



松がえにおとなふよはの風さえてまだ春しらぬ山のしたいほ

立春月

おもひきや春の日数もきのふけふほの三か月の霞べしとは

浦霞

もしほやくけぶりもそれとみえぬまで浦の名しるく霞そめけり

尋花

ながき日のくる、もしらで咲しやと花にぞたどる春の山ふみ

雲雀

野べはまた霞ながらも春きぬとかすむ雲ゐにひばりなくらし

花散

咲ばちる花のうき世としりつ、もなどうとむらし春のよあらし
みねの雲あとなくきえてみよし野のふもとにつもるしなのしら雪

水上桜

山ざくら下ゆく水のかげみればちらぬ梢の花ぞながる、

梅薫袖

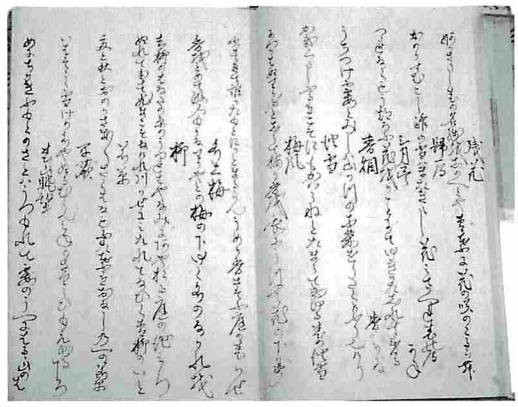
みしひるの名残しられてよるも猶たもとににほふ軒のうめが香
人しらばとがむるばかり立よらぬそでさへにほふ風の梅が香

野春草

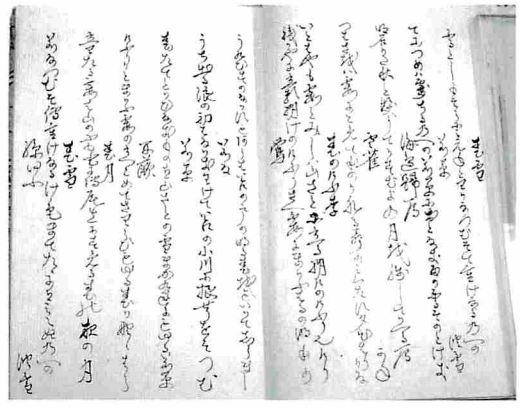
けぶりかとまがふ霞の立そめて若草もゆる飛火の、はら
立わたる霞ならでは若草のみどりはてなきむさしの、はら

隋柳風

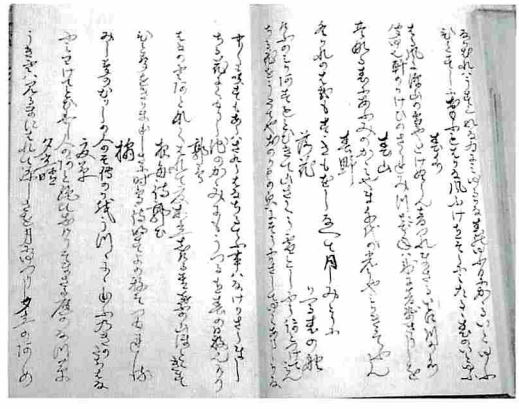
あらそはぬ心をしれと風に身をまかせてやすくなびく青柳
飛鳥風かはるも時のならひとや渕せになびく春の青柳



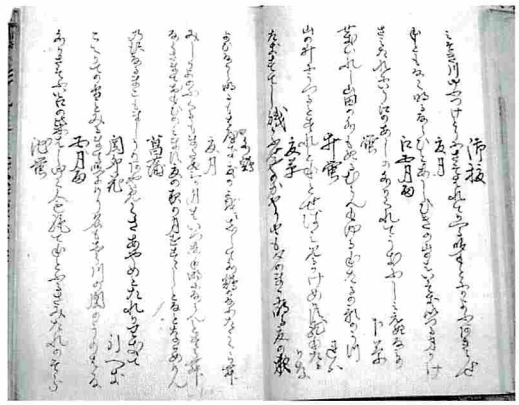
残花
あかざりし春の名残をしのべとや青葉に花の咲のこるらむ
帰雁
おのがすむこし路の雪はまたきえし花みてかへれ春の雁かね
三月尽
つれなくもうつろふ花をかことにてゆきかたしれず暮る春かな
青烟
うちつけに霞とみしは山がつの真柴をりたくけぶり也けり
淡雪
かきくらしふるはこぞにもかはらねどたまらできゆる春の淡雪
梅風
につかはぬわが身としらで梅が香を衣にうつす花の下かぜ
吹すぎて誰かたもとにかとまるらんうめが香さそふ庭の春かぜ
香をとめて汲人もかなわかやどの梅の下ゆく水のながれを
柳
青柳のはなだの糸のうつればやなみにあやおる庭の池みづ
ぬれてほすひまこそなけれ川かぜにみだれてなびく青柳のいと
若草
夏と秋とおのがさま〳〵さくはなもふた葉はおなじのべの若草
早蕨
いはそゝぐ雪けの水やぬるむらんみねのさわらびもえ出るころ
春山眺望
めにちかきふもとのさとはうづもれて霞のうへにはるゝ山のは



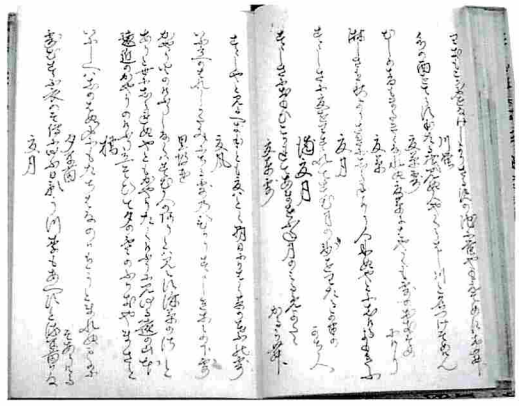
春雪
ふるとしもそらにみえねどわかなつむそで重げなるのべの淡雪
若草
てにつめば露ちるのべの若草におとなき雨のふるぞのどけき
海辺帰雁
明石がた秋と契りてかすむよの月を残してかへる雁がね
雲雀
つばさをば霞にこめてほのかなる声のみくだす夕ひばりかな
春のけぶり
いとはやも霞とみしは山さとに立る朝げのけぶり也けり
賤がやに立る朝げのけぶりさへ霞にまがふはるの明ぼの
鶯
うぐひすのなかずもあらば谷の戸の明る春をもいかでしらまし
若な
うち出る浪の初はなかきわけて谷の小川に根せりをぞつむ
若草
春たてどかひなきものは山さとの雪まかくれにもゆる若草
早蕨
けぶりかとまがふ霞の立こめてさわらびもゆる春か野、はら
春月
立わたる霞は山のふもとにて尾上にすめる春の夜の月
春雪
若なつむそで重けなるけ色までたゞにはみえぬのべの淡雪
いとゆふ



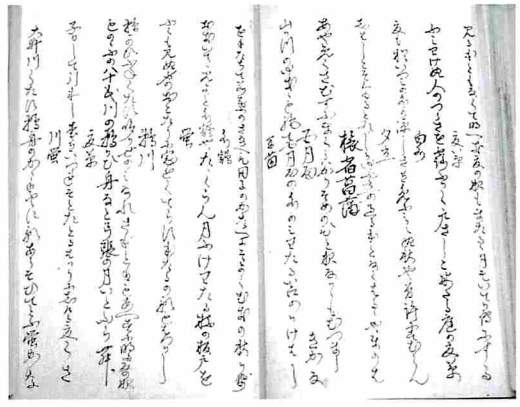
ながむればうすくれなひにみゆるかな春のゆふ日にかゝるいとゆふ
ひとすじにおもふもはかな風ふけばそらにみだるゝ春のいとゆふ
春水
はる風に深山の雪やとけぬらん音つれまさる谷川の水
聞ゆ也軒のかけひのさゞれみづ去年は氷に音せざりしを
春山
昔なる春にあふみのかゞみやま千代の光りやみがきそふらん
春野
冬がれのはぎもすゝきもをしなべて同じみどりにかへる春の野
落花
けふのみかあすもとひきて山ざくら雪としふらばあとつけてみん
ちる花をうたてやおのがもの顔にそらにかざしてゆくあらしかな
中〳〵に咲すもあらばさくらはなちるてふ事はなげかざらまし
ちる花にくもりし池のかゞみにもうつるは春の日数也けり
郭鳥
はなの雲あとなくはれて夏木立しげる青葉の山ほとゝぎす
夜毎待郭公
ひと声をきかまほしさに時鳥待明すよの数ぞつもれる
橘
みし夢のむかしの人のそでのかをうつゝにゝほふのきのたちばな
夏草
ふみわけてとひ来し人のあと絶てしげりぞまさる庭のなつ草
夕立晴
うき雲は見るまにはれて涼しさを月にゆづりし夕立のあめ



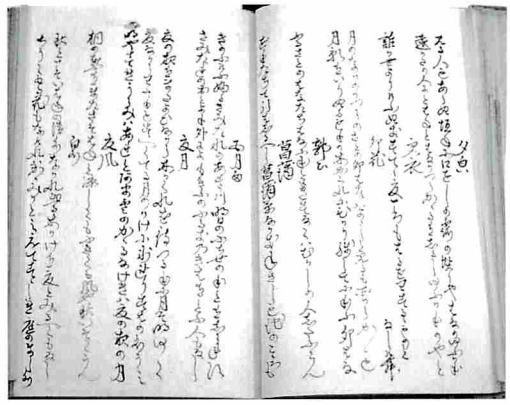
御祓
みそぎ川ゆふつけどりにさそはれてかへるたもとにかよふあきかぜ
夏月
ほどもなく明るならひとあしびきの山のはいそぎいづる月かげ
江五月雨
さみだれにいり江のあしの水かくれてうきふしみえぬなみの下草
蛍
せきいれし山田の水もぬるむらんもゆるほたるの影のうつれば
井蛍
山の井にうつるとすれどほとせはみみるかげめかす飛ほたるかな
夏草
たきすてし賤かふせやのかやり火も夕のまゝに明る夏の夜
水鶏
よひながら明るもはやき夏のよをしらで水鶏のなにたゝくらむ
夏月
みじかよのふくるもまたぬ三か月はいつあり明にならんとすらむ
なくさまておもひのみます夏の夜の月をすゞしとなとながめけん
菖蒲
の沢なるまこもましりのあやめぐさあやめとたれかわきて引べき
関卯花
こえかての雪とみるまで咲にけり名もしら川の関のうのはな
五月雨
水かさそふ谷の柴はしゆく人も絶てほとふるさみだれのそら
池蛍



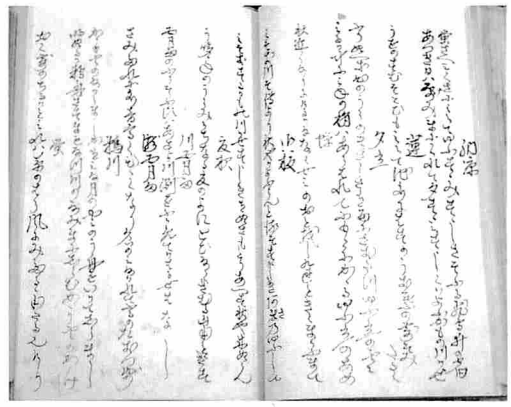
わきもこか身をなげしよりさる沢の池に蛍やもえそめにけむ
川蛍
水の面をてらすほたるを見ぬ人やくらはし川と名づけそめけん
夏草露
むしの音もまたきゝなれぬ夏草にはやくも露のおきそめにけり
夏草
淋しさは秋よりさきにしられけり人来ぬやどにしげるよもぎふ
夏月
すゞしさに夏をわすれてすむ月の氷をわたるよはのかち人
浦夏月
すゞしさにおもひこがれてあまをふね月のみるめよたゞか(か=脱)るらむ
夏草露
すゞしやとみるべきほども夏はとく朝日にかはく草の葉の露
夏風
ゆふ立のはれしかたみにちる露のひかりすゞしき木ゝの下露
里蚊遣
かやり火のけぶりしなくばすむ人のありとはみえず深草のさと
ありと世にしられぬやどもかやりたくけぶりにみゆる遠の山本
遠近のかやりのけぶり立そひて夕の雲のふかきやまさと
橘
いにしへはしのばぬ身にもたちばなのかはうとまれぬものにぞありける
夕早苗
露むすぶ衣のそでにゆふ日影うつりもあへずとる早苗かな
夏月



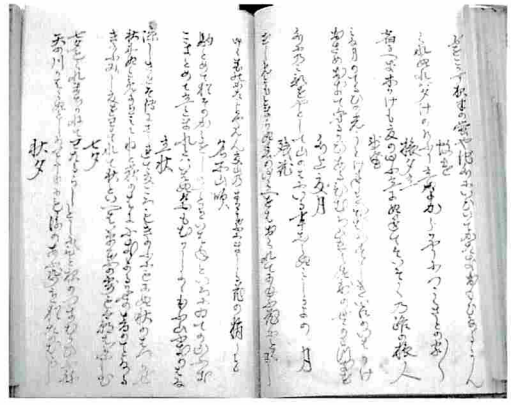
みるほどもなくて明べき夏の夜もまたるゝ月ぞいでがてにする
夏草
ふみわけぬ人のつらさを露ふかく戸さしこめたる庭の夏草
泉
夏も猶いづみの水の涼しさはめにみえぬ秋やそこにすむらん
夕立
しばしとぞくもるとみしかゆふ立の過るほどなくはるゝやまのは
旅宿菖蒲
あやめくさむすぶまくらはかりそめのひと夜ながらもむつまじきかな
五月雨
山がつのゆきゝも絶て五月雨の水のみわたる谷のかけはし
早苗
をりたちて若葉のさなへ取田子のかたへにそよぐむぎの秋かぜ
水鶏
おきいでゝみよと水鶏やたゝくらん月ふけわたる旅の板戸を
蛍
ふみもみぬ身のおこたりに窓近くてらすほたるの影もはづかし
鵜川
鵜かひぶねくだすたかせのみなれぞほとりもあへずに明る夏の夜
もの、ふの八十氏川の鵜かひ舟など弓張の月いとふらむ
夏草
子(の=脱)日して引来し松はいづれぞとたどるばかりにしげる夏くさ
川蛍
大井川くだす鵜舟のかゞり火に影あらそひてとぶ蛍かな



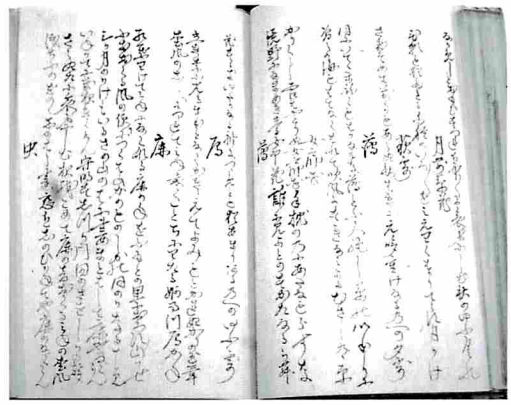
夕顔
みる人もあらぬ垣ねに口をしの露の契りやはなのゆふがほ
遠かたの人にとはねどはなかづらかゝるはしるしゆふがほのやど
更衣
誰か世よりけふぬぎすて、夏ごろもはるをわする、ものとなしけむ
卯花
月のなかのかつらのさとの卯(の＝脱)はなはよゝしとみるも所からかも
月影はいりぬるもりの木がくれにひかり残してにほふ卯(の＝脱)はな
郭公
ふるさとのはなたちばなにほとゝぎすなくはむかしの人したふらん
菖蒲
をりたちて引はしるべし菖蒲草ながきねざしも池のこゝろも
五月雨
きのふけふふるさみだれのあすか川明日のふちせのほどはしられず
さみだれのおとより外によもぎふのふるきのきばはとふ人もなし
夏月
夏の夜はまたよひながら木がくれを待つるもとに月そ明ゆく
夏ながらわたりもすべくてる月のかげに氷れりすはの水うみ
明やすきうらみはあれどあま雲のかゝるなげきは夏の夜の月
夏風
桐の葉はまたさそはねど涼しくもふきくる風や秋いそぐらん
泉
秋とこそいはねの清水ながれ出る木かげは夏とみるべくもなし
ちりくもる花もなければかゞみかとみえてすゞしき庭のまし水



納涼
蛍さへみくさにみえてゆふすゞみすゞしさぞふる飛鳥井の宿
あつき日はなみまにくれて夕すゞみすゞしくかよふかもの川かぜ
蓮
うをのすむそこひもみえて池水にはすのうき葉の露ぞみだるゝ
夕立
ふりぬべき心のうらのまさしさは雨にさきだつゆふ立の雲
みるかげにみねの梢はあらはれてふもとにかゝるゆふ立のあめ
蝉
秋近くなりにけるかななくせみのおとをしぐれとき、まがふまで
御祓
みそぎ川そでより秋やかよふらんとるぞすゞしきあさのゆふして
みそぎするかもの川かぜすゞしきはぬさもとりあへず秋や来ぬらん
夏夜
うたゝねのうらみがちなる夏のよにとひなくさむる山ほと、ぎす
川五月雨
五月雨のふりそふ頃はあすか川渕をふかめてかはるせはなし
瀧五月雨
さみだれに水音高くひゞくなり名のみながれてふるのたきつせ
鵜川
かゞり火のなからましかはみな月のやみのう舟をいかでてらまし
明ぬるか鵜舟さすまもなつ川のなみまにしらむかゞり火のかげ
蛍
おく露のちるかとみれば草のはら風にみたる、ほたる也けり



身をこがす夜半の蛍や池水にいひいてかたきおもひなるらん
蚊遣
くれぬれば夕げのけぶり立ながらかやりにつゞくさとの家〳〵
旅夕立
宿るべき木かげも夏のゆふ立にぬれてぞいそぐの路の旅人
氷室
みな月のてるひの光うとければひむろすゞしき谷のいはかげ
おさめおきて守るかひあるひむろ山きえぬ氷の世、のみつぎを
水上夏月
水にのみ影をやどして山のはにいる事しらぬみじかよの月
残花
をしめどもとまらぬ春のゆくへをばおくれてにほふ花にとはまし
ゆく春のかたみとやみん夏山の青葉にまじる花の梢は
名所山吹
駒とめて猶そのかみをしのべとはいはねどいろにゐての山ぶき
こまとめて立どまれとはいはぬ色ももむかしに、ほふ山ぶきのはな
立秋
涼しさはそでにしられて夏ごろもきのふにもにぬ秋のはつかぜ
秋来ぬとめにはみえねど荻のはにふきよるかぜの音のことなる
きのふみし夏をわすれて秋といへば草葉の露も今朝は身にしむ
七夕
七夕もくれまちかねてわたるらしとしにひと夜のつまむかひぶね
天の川かはらぬとしのわたりにも後のあふせは猶たのむらし
秋夕



ながめしとおもひすへれば中〳〵に哀身にしむ秋のゆふぐれ

月前草花

ひるも猶たどる千種のいろ〳〵をみえわくばかりてらす月かげ

萩露

さきそめてきくかもあらぬ秋はきにえだ重けなるのべの夕露

薄

ほにいで、まねくもはかなはな薄とふ人絶し草のいほりに

そらの海もはてなくはれて吹風にす、きなみよるむさしの、原

女郎花

かりくらし吾はやどりぬ女郎花手枕ののにあだなもらすな

鏡野になまめき立る女郎花誰にみよとのすがたなるらむ

薄

花す、きゆたかなる袖につ、めども猶あまりあるのべのゆふ露

雁

立きりにみるまほとなくかき、えてよみもとかれぬかりの玉章

松風のしらべにつれてみね遠くこくちにわたるあまつ雁かね

鹿

紅葉わけてみねになくなる鹿のねをふもとの里におろす山かぜ

ふきおくる風の便りにつくば山かのものしかのほのかなるこえ

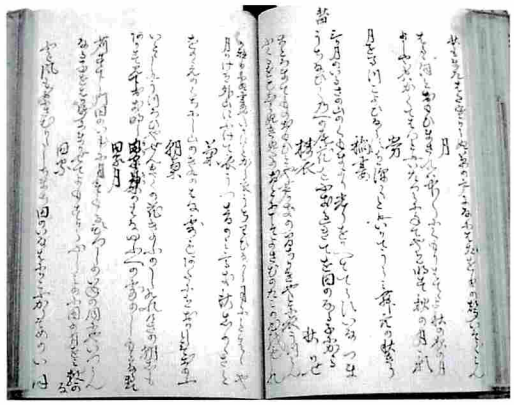
三か月のかげもいるさの山のはに妻まとはして鹿やなくらん

いねかてに幾夜きくけん守明すしづか門田のさをしかの声

さらぬだに哀身にしむ夜をこめて鹿の音おくるみねの松風

浅ぢふのをの、しのはら妻恋はしのびかねてや鹿のなくらん

虫



秋もまたはだ寒からぬ草の戸になにはたをりの声いそぐらん

月

はる、ほどおもひまされば中〳〵にくもりはて、よ秋の夜の月

よしや身はかくてはつともいたづらにねてやは明ず秋の月影

霧

月をまつこよひならずは深くともいかでうらみむ空の秋ぎり

稲妻

三か月のいるさの山のくもまより光りをかへてらすいなづま

秋田

うちなびくのべの尾花をふき過ぎてを田のなる子にかゝる秋かぜ

椋衣

まとろまてものおもひとや芦かきのまぢかきやどに衣うつらん

ふくるをもしらぬきぬたのおとにこそよさむのたみの心をもしれ

かえり来ぬ妻やいかにとから衣うちわびながら月にとはゞや

月かげは外山にふけて衣うつ音のみ高き秋しの、さと

菊

をの、えのくちにし山のきくのはな露もあだにはおかじとぞおもふ

朝菊

いと、しくうつろひやせんきくの花きのふのしぐれけさの朝しも

あかずみておき明しけり菊のはなゆふべの露のしもとなるまで

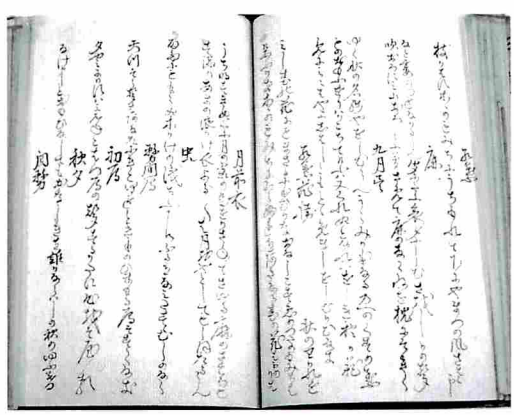
田家月

苅すてし門田のいほに月ぞもるひつしのいねのほにやいつらん

なる子をばかせにまかせてよもすがらふしみの小田の月をみるかな

田家

ふく風も身にさむからじちまち田のいなはにかこふかりそめのいほ



紅葉

枝かはす木〻のもみぢにうちもれて下にやまつの風さはぐらし

鹿

なと妻のつれなかるらん聞にだに哀身にしむさをしかの声

吹おろすみ山おろしに夢さめて鹿のなくねを枕にぞきく

九月尽

ゆく秋の名残やをしむらんうらみかほなるのべのくすの葉

ものおもふをりはかこちてけふは又くれぬとなればをしき秋かな

めにみえばやよしばしともとゞめましをしむかひなき秋のわかれを

紅葉花勝

みし春の花にもまさるにほひかなおなじこずえのつたのもみじは

色ふかき木〻のもみぢにくらぶればあだなる春の花はものかは

月前衣

うち明すきぬたに月の霜の色をかさねてさゆる麻のさごろも

すまのあまの浪かけ衣よる〳〵は月をやどしてもしほたるらん

虫

雨だにももらぬ木かげの浅ぢふにふるはなみだ(の=脱)すゞむしのなく

霧間雁

天つそら声はあなたにきこゆれどきりのひまもる雁ぞすくなき

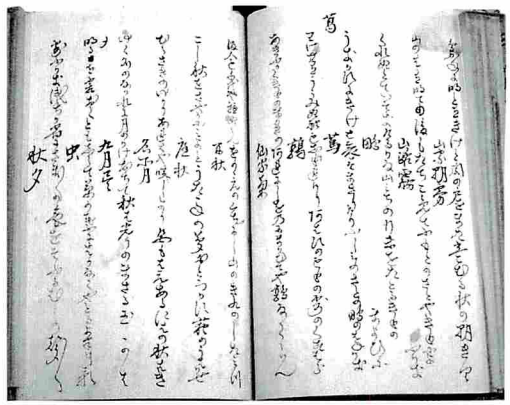
初雁

夕やみにかずはみえねどはつ雁の声するかたに心をぞやる

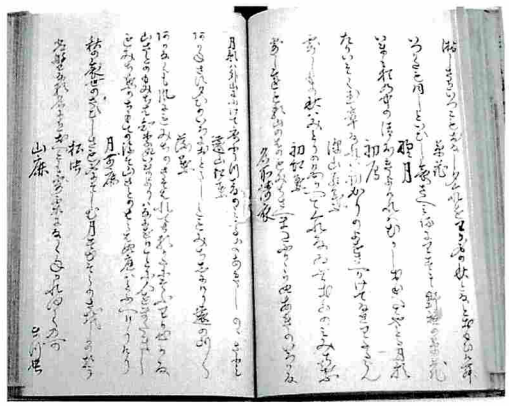
秋夕

なげかしとおもひなしてもかなしきは誰かならはしの秋のゆふ暮

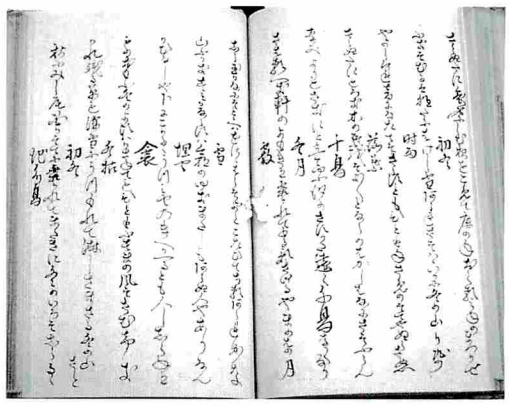
関霧



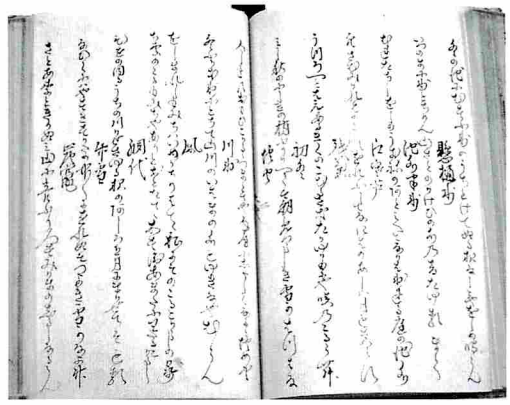
鳥がねに明とはきけど関の戸をまた立こむる秋の朝ぎり
山家朝霧
山のはは明ての後もたちこめてふもとのさとやきりによふかき
山路霧
くれぬとていそぎけるかな山みちの行末をたどるきりのまよひに
鳴
うきかすにきけば哀ぞまさりけりふしみのさとの鳴のはねかき
葛
わけゆけばうらみぬ袖もしほれけりあはずのもりの露のくずはら
鶉
あきふかくきりのまがきのあれにしをのにまかひてや鶉なくらん
仙家菊
汲人も千代やへぬらんをの、えのくちにし山のきくのしたみづ
早秋
こし秋をさやかにみよとうた、ねの夢おどろかす荻のうはかぜ
庭秋
むらさきのゆかりあればや咲しより色もはえあるにはの秋はぎ
名所月
ゆく水のながれに月のかけおちて秋は光りのまさる玉かは
九月尽
明るは霜おくともしらで草の葉にはかなくやどるよは(の＝脱)月影
虫
露ふかき浅ぢが宿にさまくの哀をぞふるむしの声〳〵
秋夕



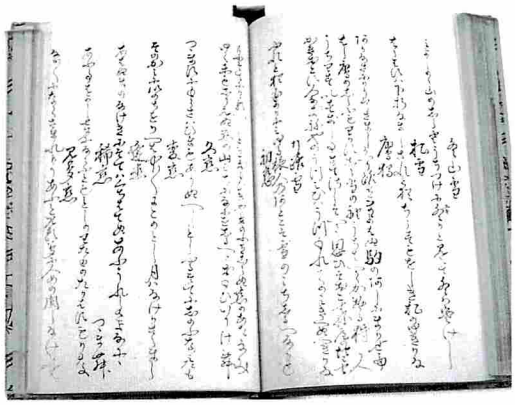
淋しさはいづこもおなじ夕ぐれをわが身の秋となどおもひけむ
草花
いづかたも同じといひし哀さへみるにわする、野べの草花
野月
いまも猶の中の清水きよければむかしおぼへてやどる月影
初雁
たかいそぐ玉章なれば初がりのよをさへかけてなきわたるらん
深山紅葉
露しもの秋はみどりの色かへてくれなゐふかき山のもみち葉
初紅葉
露しぐれもる山のはのもみぢさへまたふか、らぬあきのいろかな
名所椿衣
月影は外山にふけて衣にうつ音のみ高きあきしの、さと
遠山紅葉
あかねさす夕ひのいろにおとらじともみぢしにけり遠の山〳〵
落葉
あかなくも風にもみぢのさそはれてちるかたにそふわが心かな
山さとのもみぢはちりぬいまよりはなにをかことに人をまたまし
もみぢ葉のちりての後ぞ山さとのはらはぬ庭はとふべかりけり
月前鹿
秋の哀世のさびしさも身にぞしむ月すむそらのさをじかの声
松虫
常盤なる名にはおへども露霜になくねかれゆくのべのまつ虫
山鹿



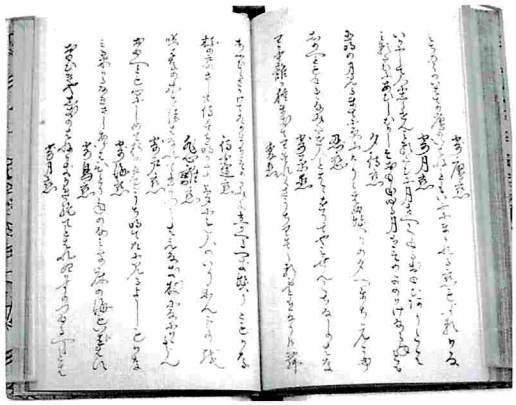
さらぬだに哀身にしむ夜をこめて鹿のねおくるみねのまつかぜ
初冬
ふきそむる今朝だにはげし雪あられさそはゞいかに冬の山かぜ
時雨
やよしぐれ音になたてそさらずともひとりねざめのそでやぬらさぬ
落葉
さらぬだにもろき木の葉をそよ〳〵とならのむかしはなにさそふらん
千鳥
なみよりもさきにと立てゆふ汐のさすかた遠く千鳥なくなり
冬月
さはるべき軒のよもぎは霜かれてもる影さゆるやまのはの月
霧
しら玉かなにぞと、へばをざ、はらそよとこたひてちるあられかな
雪
山ふかきすみかならずば今朝のゆきまたしもあらぬ人やありなん
埋火
かひなしや下にこがる、うづみ火のきへかへるとも人ししらねば
衾
ものおもふ冬のよ頃はかさねてもひとりふすまの風ぞさむけき
冬枯
かれ残る草も深雪にうづもれて淋しさまさる冬の山さと
初冬
秋にみし尾花かそでに霜がれてまたきに冬のいろぞしらる、
池水鳥



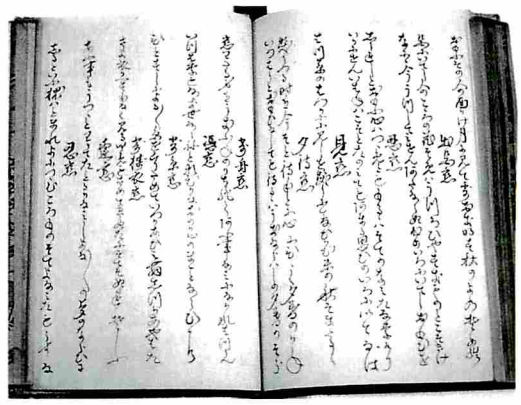
冬の池にむすぶ氷のうちとけてぬる夜なしとやをしの鳴くらん
懸樋氷
いつのまに氷とぢけん山さとのかけひの水の音たゆるまで
池水半氷
むれたちしをしのうきねのあとみえてなかば氷れる庭の池水
江寒芦
空さむみかれはのこらずをれふしてなにはのあしは月をさはらず
残菊
うつろへどはえあるきくのこむらさきたがゆかりにや咲のこるらむ
初冬
みし秋のにしきの梢ふりかへて今朝めづらしき雪のはつはな
埋火
人しれずおもひこがるゝつまとてやねやにしたしくなる、埋め火
川氷
冬ふかき氷にとぢて山川のいはまの水もゆきなやむらん
凧
をしまれしもみぢはいつかちりはて、松にぞのこるこがらしのかぜ
ちりのこるもみぢやありとおとたて、木ずえあまたにわたるこがらし
網代
ひをのぼるうちの川かぜさゆる夜のあじろは月にまかせてぞもる
竹雪
なびくにはやすきすがたの中〳〵にをれぬぞつよき雪のなよ竹
炭竈
さとありときかぬみ山に立けぶり人すみかまのしるしなるらん



冬山雪
みよしの、山のしら雪うちつけにゆきかとみえて冬の寒けし
松雪
はらはずは下折なましされど猶ちらすもをしき松のゆきかな
鷹狩
あかなさにかりくらさましかへり路はまよはぬ駒のあしにまかせて
はし鷹のしらふもわかすしら雪の袖うちはへてかへる狩人
うちわすれすぎし事までさしそへて思ひぞおこすねやの埋み火
かきおこす人なきねやのうづみびはうづもれてのみきへぬべきかな
行路雪
ふれど猶ほのかにみゆる旅人のあとこそ雪のみちしるべなれ
初恋
けふそてにか、るべしとはおもひきやきのふはしらぬ恋のあだなみ
ゆく末もしりえぬ恋の山みちになにをしるべとおもひいりけむ
久恋
つ、まずにもらさばひまもありぬべしとしふるそでにしのぶなみだも
変恋
そのかみにいのちをかへば中〳〵にこのとし月はなげかざらまし
逢恋
あはぬまのなげきにそではくちはてぬあふれしさよなに、つ、まむ
稀恋
あふ事はよし七夕にならふともとしのわたりのたがはずもがな
見夢恋
なか〳〵になくさまれけりあふとみる夢に人めの関しなければ



寄鷹恋
みちのくのいはての鷹のいはねどもいふにまかれる恋もするかな
寄月恋
いかにして人にしらせんみるたびに月さへくもるおもひありとは
みるたびにあひしむかしぞおもほゆる月はそのよのかげならねども
夕待恋
有明の月見るまでに更にけりとはぬ契りの夕べまぢえて
忍恋
しのべどももる、なみだを人とはゞをりてやみせんくちなしのはな
寄草恋
わか中に誰か種まきてわすれぐさうちわすらる(る=脱)身とはなりけむ
変恋
あふひくさかけてたのまばそのかみに立かへるべき契りともかな
待不逢恋
旅の戸のさして待すは明がたの夢にも人のいり来んものを
飛心離恋
咲はなの木ずえはなれて玉かづらはえなき枝になにか、るらん
寄戸恋
おもへども心にしめて杉の戸をうち明てだにみるよしもがな
寄海恋
みるめかるなきさしあらはひとりねのなみだの床の海もいとはず
寄鳥恋
おもひきやしぎのはねかきかき絶てとはれぬかずのつもるべしとは
寄月恋



おもふその人の面かげ月にみて露おき明す秋のよのそら

出色恋

色にいでし人のこゝろの花そめはうつろひやすきものとこそきけ

なに、今うつしてみせんあたならぬ心のいろにいでしおもひを

忍恋

しられじとおもふ心はつゝめどももるゝはそでのなみだなりけり

いかにせんいはねはこそとたのみてもあまる思ひのいろにいでなば

見恋

はつ草のはつかにみしを契りにてなびかむ末の秋ぞまたなく

夕待恋

契りつる時は今ぞと待ほどに心にひゞく夕暮のかね

いつはりとおもひなしても待るゝはうきならはしの夕暮のそら

寄舟恋

恋わたる身はうきふねのかち絶てあふ事なみになかれはつらん

憑恋

いつはりもなき世ならねど頼むかなおのが心のまことならひに

寄糸恋

ひとすじによる〳〵糸をくりためていつかあひみむしつかあやはた

寄梼衣恋

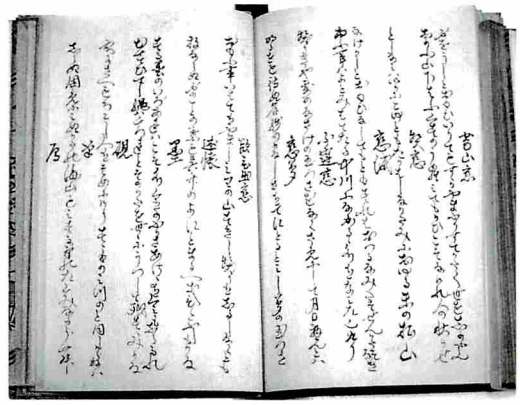
さよ衣かへすほなくみるゆめもさめてきぬたにそでぞぬれそふ

逢恋

あふ事もうつゝとわかてたとるかなみしよなくの夢のならひに

忍恋

しるといふ枕はとまれよにつゝむころものそでよなみだもらすな



寄山恋

身をうしとおもひいりてもすゞかやまふりすてがたく世をしのぶ也

しのぶ山下はふくずのうらみてもかひこそなけれ人の秋かぜ

契恋

としなみはいかにこゆともたかはしなかたみにおゆる末の松山

恋誠

なげかしとおもひなしてもともすればおつるなみだぞせんかたぞなき

あふ事はよどみはてたる中川にながる、水はなみだ也けり

不逢恋

契りきや霧のなさけの玉づさをなぐさめにして月日へんとは

恋夢

明るをも待ぬ名残のかなしさはてにとるとみし夢の玉づさ

歓ひ出恋

おもふ事いはではやましみわの山すきし契りはしるしなくとも

述懐

数ならぬ身のことの葉も呉竹のよにとまるべきひとふしもがな

墨

する墨のいろあればこそ水ぐきのふかさあさ、はつきもしらるれ

むすびてし縄はくつれとそのかたを世、にうつして残す、みかな

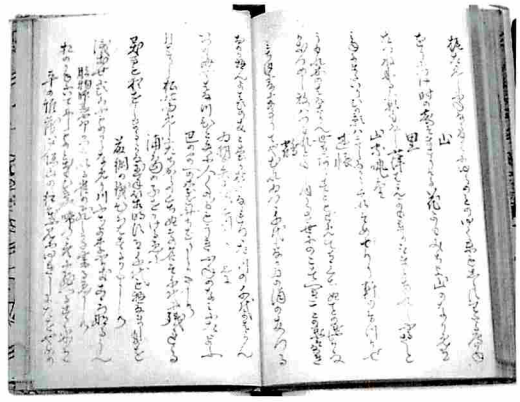
硯

衣にさへもろこし人はそめにけりす、りのみづのとぼしからねば

筆

しらぬ国めにみぬかたの海山もみする筆のたくみなるらむ

雁



梶たえしふねならなくにゆらのとのゆく末もしらずわたる雁がね

山

をりにつけ時の哀ぞまさりける花よもみぢよ山のながめは

里

たづね来る人影もなし葎はえよもぎのそまとあれしふるさと

山家眺望

みねにまたいりびの影はさしながらくれそめてけり軒のまつかぜ

述懐

うもれ木のはなさかん世はあらずともせめてはくちぬことの葉もかな

かきつめし数はつもれどもしほぐさ世にのこすべきことの葉ぞなき

鶴

みち汐になにあさりてやむれゐつゝ千代もなかゐの浦の友づる

おのかへんよはひの友と松か枝になれつゝたつの千代よはらん

為朝の矢にふねくつがへりしえに

いづの海やはなつひと矢に人〳〵の身もうきふねのなみにたゞよふ

巴のまへの松をたちをりしかたに

引をりし松のためしにたちからのくちぬその名ぞ千代に残れる

浦島の子をかけるえに

いまも猶をしまる、かな玉手箱明すは千代もへなましものを

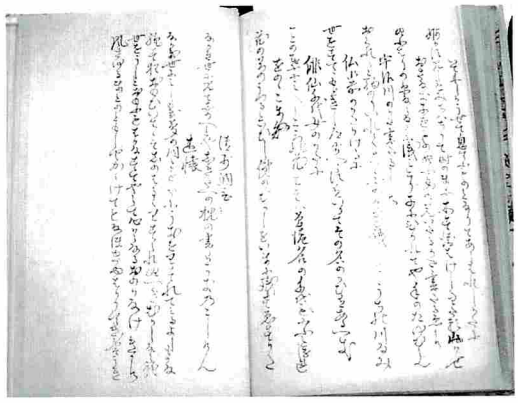
藤綱の銭ひろはするかたに

浅きせにひろふものからなめり川ふちよりふかきす、ろなるらん

彫物師甚五郎のつくれる雀の飛しかた書るえに

おのが手にいで来しものとおもひきや啼つゝ空に飛べるすゞめは

平の維茂戸隠山の紅葉みにゆきしにたをやめの



いて来しかうせて鬼てふものとなりてあらはれしかたに
あかずみしもみちはちりて時のまに木ずえはげしくわたる山かぜ
おさなき子をものぬふ女のみいたるかた書たるえに
ぬふはりの糸ならなくに浅みどり子にひかれてや手のたゆむらん
宇治川のかた書たるに
おくれじと駒のりいれてもの、ふの名を残しけりうぢの川なみ
仏御前のかたりけるに
世をすて、もときし道にかへらずはいかでその名のかひはあるべき
俳仙千代女のかたに
ことの葉にみへしこ、ろの花こそはその名の千代もに(ほ=脱)ふとをしれ
をの、こまち
花のいろうつるといひし俤のむかしをいまに残すえすがた
清少納言
ながき世にみてしのべとやしきたへの枕の書(を=脱)ばかきのこしけん
述懐
ながき世にみじかき夢のほどをだにうきをわすれてみるよしもがな
絶ず猶おもひいで、ぞしのばる、わすられぬべきむかしならねば
世をうしとおもふもはかなすてやらで心からなるおのがなげきに
風さゆるまどのともし火か、げてもなほきゆばかりくらき身ぞうき

終わりに

翻刻をしてみて、明らかに書き写している際に起きるような間違いが見られる点や、筆の勢いや墨継ぎの状態から、手本を見ながらの書写本であろうと考えられる。後藤逸は独特な文字の崩しや仮名遣いをしており、流れるような美しい文字で、短冊のみならず扇面や色紙、掛け軸へ和歌を書いている。その中で『伊津女歌集』の前半のたどたどしさはいつものくずし字の様子とは大きく違っている。しかし後半になり、後藤逸らしい筆使いが見られる部分もあり、本人の書写かどうかは判断に迷う。高橋傳一郎氏は「後藤逸が一時農作業におわれ、筆を断つ時期があったようで、久しぶりに筆をとったからとも考えられる」と考察しており、自筆の可能性を残している。その可能性を検討するには、最初に述べた通りより多くの資料の発見が不可欠である。

今回の翻刻にあたり、高橋傳一郎氏よりご教示いただいた。この場をかりて厚く御礼申し上げる。

註

1. 後藤逸　文化一一年（一八一四）～明治一六年年（一八八三）
湯沢市（旧稲川町）出身。本名イチ（戸籍）。農家に生まれ、幼少から才能を認められて歌や書を習い、江戸藩邸に召されるまでになる。

2. 『伊津女歌集』　秋田県立博物館収蔵資料。昭和四八年に収集、茂木家文書として登録されている資料に含まれる。